

327
414

善通寺案内記

026091-000-5

327-414

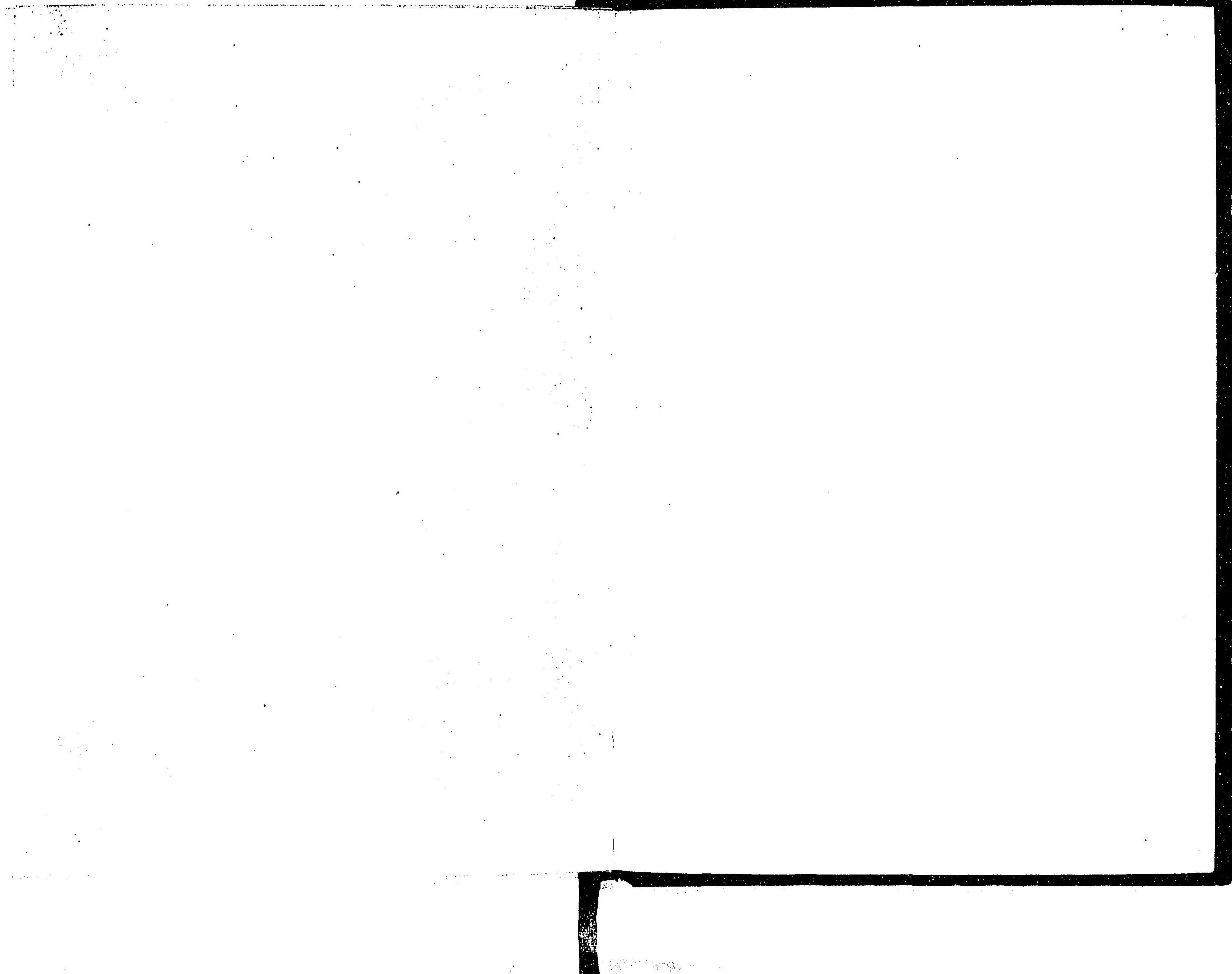
善通寺案内記

伊藤 一郎/編

M44

ADC-3747

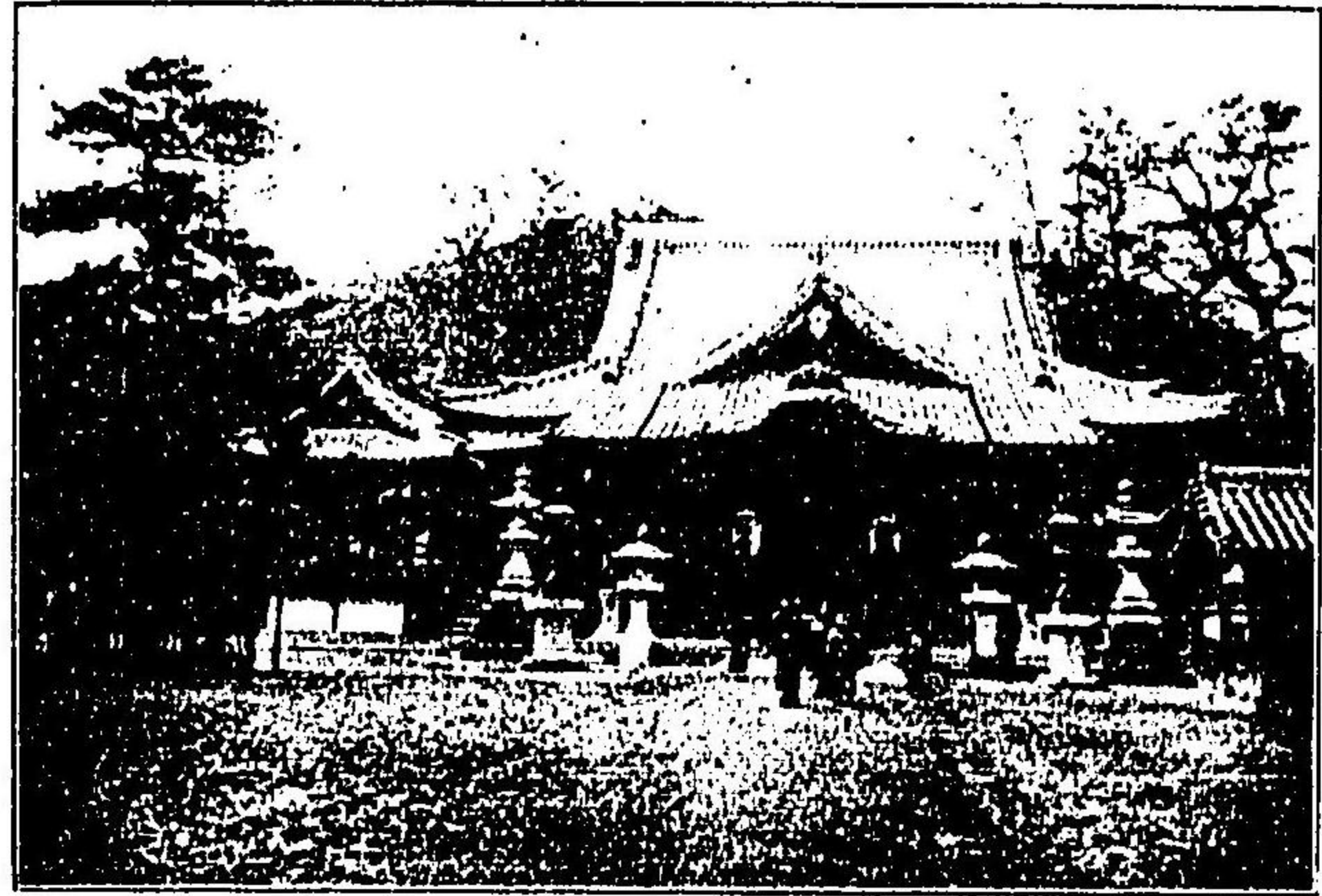




327-414

普通寺案内記

昭和
44. 2. 9
東京



御影堂



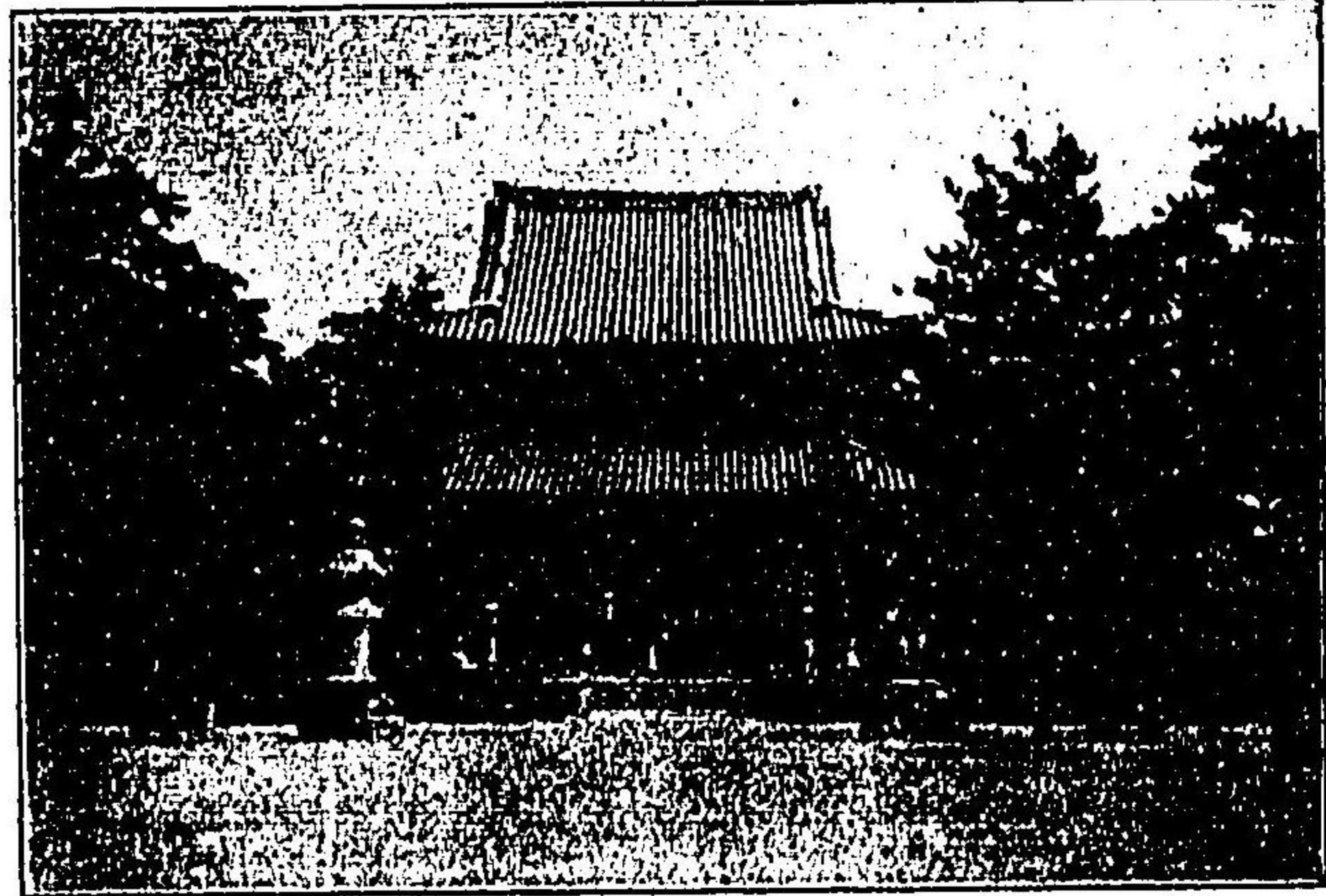
御影の松



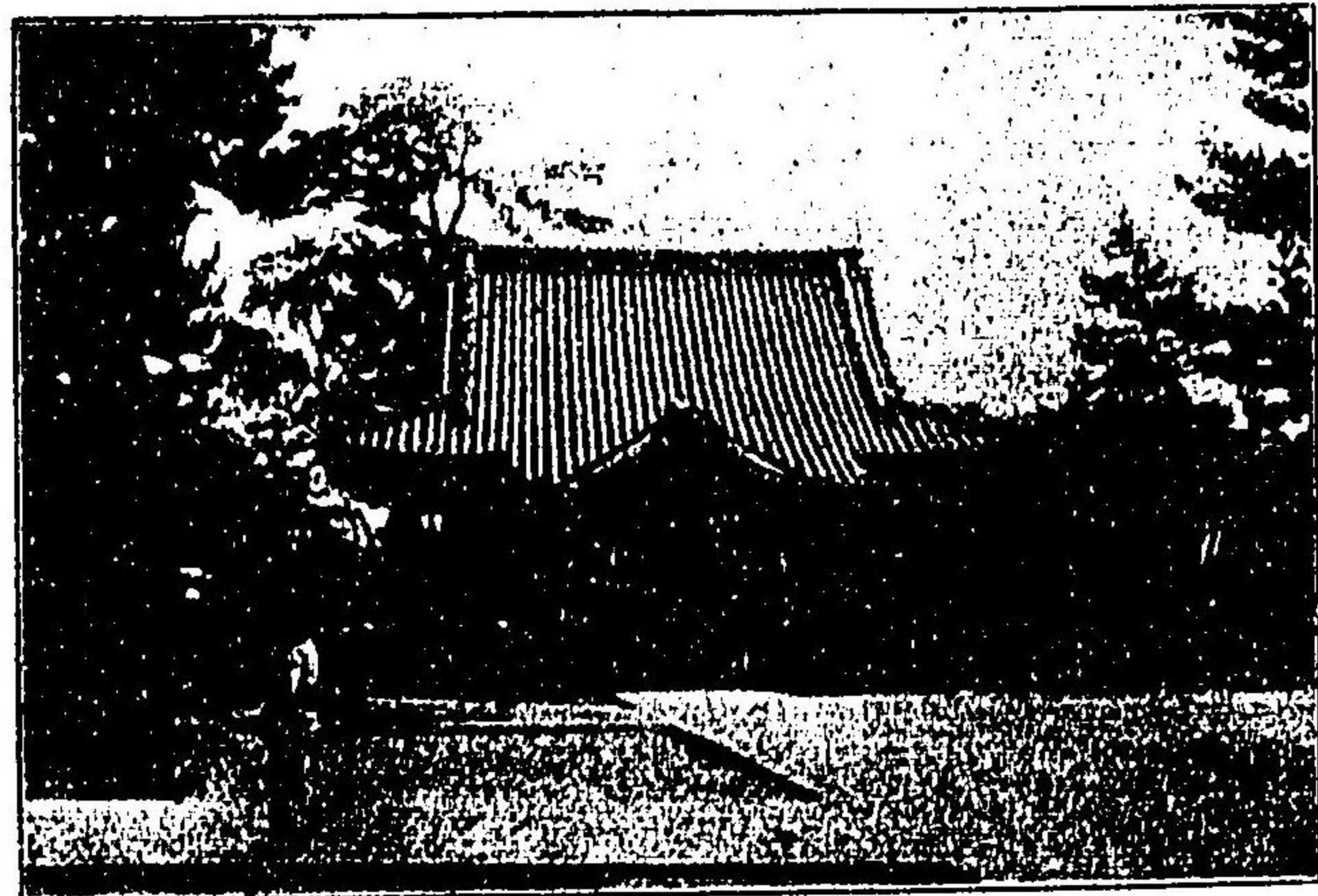
塔 重 五



楠 大



堂 金



堂 行 常

善通寺案内記

述意

夫れ善通寺は弘法大師誕生の靈場第十一師團設置の要所に
して海陸に汽車氣船の便あり且つ丸龜善通寺間電車鐵道敷
設の計畫中なり新市街の家は建造年々増し各府縣の人は出
入日々頻りなり然り而して旅客往々未だ善通寺の案内記な
きを憾む蓋し案内記は管に旅客の需用を充すのみならず其
土地の史跡、風光、物産等を社會に廣告するの利益あり頃日
某氏吾輩に之れを艸せんことを懇懇措かず爰に見聞の概畧

を記し其責を塞ぎ以て一時の間に合せ他日完全なる著述者の出づを俟つと云ふ

明治四拾參年孟冬

編者誌す

善通寺案内記

楓堂 伊藤 一郎編

鐵道讚岐線善通寺驛の標示

善通寺へ西十一丁

驛より

十一師團司令部へ西十四丁

屏風浦 五岳山 善通寺

善通寺は四國八十八箇所七十五番の札所にして救願所なり弘法大師誕生の靈地なる故に誕生院と號す寺格は別格本山なり

善通寺の緣起

弘法大師の祖先は人皇第十二代景行天皇の御子稻舂入彦命なり命兄の日本武

尊みかどに隨まひ東夷を征伐し功あり讃岐に於て勳賞の地を賜ふよりて此所に居住し
 裔孫永くその縣令たり人皇第十五代應神天皇の御宇に佐伯直の姓を賜ふ大師
 の父は佐伯左京職田君諱は善通母は從五位下阿刀大足あさきなりの妹玉寄御前なり大師
 入唐歸朝の初め佐伯善通卿其館並に園林を喜捨し以て寺院を造らんと欲す大
 師奏聞を経て大唐青龍寺の伽藍を撰うつし印度の般若三藏より授りたる印度八塔
 の土を散布し十八字の伽藍を建立す人皇第五十一代平城天皇の御宇大同二年
 に工を起し同四年に竣成す即ち父の諱を取て善通寺と号す是れ本邦眞言宗最
 初の道場なり

詠歌

我すまばよもきゑはてし善通寺

ふかきちかひの法のともしび

善通寺の沿革

善通寺昔は誕生院等の僧坊四十九箇院其他五岳山の山野に在る所の坊舎を惣
 計すれば百十院ありと云ふ歷朝の御崇敬愈厚く勅願異于他寺との御繪旨又は
 田園寄附等の御繪旨を賜はり其他種々の旨趣を以て數多の御繪旨を下さる然
 りと雖ども皇室衰へ武家盛んなるに隨ふて武家のために勅願免田を横領せら
 れ堂宇傾圮僧院廢滅の慘狀を呈す後醍醐天皇の御宇善通寺の僧徒堂塔の破壊
 を歎き宥範上人を懇請して善通寺に移住せしむ宥範元徳二年より土木の事業
 を初め北朝光明帝の曆應年間に至る迄に五重塔並に諸堂四面の門四方の垣等
 悉皆造り訖る同三年二月十七日偶護摩堂焼失し其火延て隣坊半焼す宥範北朝
 の崇光帝觀應三年正月十一日より再び護魔堂等の營造に着手し同六月二十
 一日竣工す同二十五日病に罹り七月一日寂す歳八十三なり北朝後光嚴帝應安
 四年三月十五日贈僧正の宣旨を賜ふ宥範は讃岐那珂郡の人姓は岩野氏なり學

深く徳高し善通寺を中興したる功大なりといふへし降りて後奈良天皇天文二十一年阿波の三好豊前守義賢兵を率ひ來り天霧城主香川元景を攻んとして善通寺に陣す和議成り而して退く時に火起り諸堂焼失す後陽成天皇の御宇天正十六年生駒雅樂頭親正寺領高貳拾八石を寄附し同七月生駒讚岐守三吉一正寺領高參拾五石寄附す其後高松藩主松平家九龜藩主京極家よりも寄附の免田山林等あり天文兵火以後代々の住職等再建に従事し金堂常行堂御影堂鎮守神社等漸次落成す天保十一年五重の塔焼亡せしにより仁孝天皇五重大塔再營の光顯を遂げ令めよとの御綸旨を下し賜ふ元治元年中より大塔再建を營なみ明治十五年に上棟す同十六年内務省より大塔保存金の内へ金五拾圓下附相成たり善通寺現住職佐伯宥榮僧正銳意金山の恢復を謀り日露戦役後戦勝記念として南大門を建立したるを始め大玄關客殿庫裡太旭殿寶物館等を新築或は改造し

其結構頗る輪奐の美を極む

後宇多院の宣符に曰く三國相承之燈併挑我寺五智寫瓶之水鎮湛此所一天之下誰人不潤其法雨四海之内何輩不浴其智水

善通寺境内

東門及び南大門以内中門迹の建物左に記す

金堂 七間四面 二階堂

本尊は弘法大師作の土佛 藥師如來 丈六坐像

但し大師作の土佛は兵火の節に缺損したるを集めて右藥師如來の胸の中に納む

二階の額 大寶樓閣陀羅尼の七字 有栖川親王の筆

天滿宮 北松林の中に在り

手水鉢 自然石 横幅五尺 長さ參間餘

但し雨覆ひ建物の中に在り井の水清し大師御手廻りの井と云ふ

東門 俗に赤門と云ふ昔は此處に於て雲の上人も下馬す故に此邊を下馬と稱す

常行堂 六間四面

本尊釋迦如來 坐像 長け一丈 本尊の左右は十大羅漢像

後醍醐院龜山院後宇多院三帝の御位牌を安置し奉る

維新迄此堂に於て常に光明眞言念佛を行す故に常行堂と云ふ當時の俚歌に善通寺のツウツウ念佛一口申せば金佛けになるといなソートイナコートイナソラ間違ひないといな

右の俚歌を一息に七返唱ふれば長生すると傳説し老若男女急口に云ひ離せ

り

五重大塔 高さ二十五間餘 方參間四面

本尊五智如來

弘法大師御建築より第三回目の建立なり本邦最初の五重の塔なりと云ふ

法然上人逆修塔 伽藍巽の隅に在り

淨土宗開祖法然上人即ち圓光大師當寺に詣で、立られたる石の塔なり逆修とは存命中に逆かじめ死後の墳墓を修造するを云ふ圓光大師曰く此寺は弘法大師父の爲めに建られたり一度此地に詣でなん輩は必ず一佛淨土の友たるべし云々同大師の傳記に出づ

足利尊氏利生塔 伽藍巽の隅に在る石塔なり

足利尊氏左兵衛督兼相摸守直義に命じて建立す葛石塔を纏ひ風蘭生と頗る

古色あり

南大門 日露戦役後に新築す戦勝記念の大門と云ふ

東楠庚申石堂

西楠

弘法大師誕生の昔しより今に鬱蒼と茂れる大樹の鑿楠なり即ち大師齡十八歳の時著作の三教指歸に檣樟蔽日とあるはこの楠を云ふ

鐘樓

大師氏神五所明神 兩殿 特別建造物の豫定

大師の勸請にして大歳大明神大庭大明神雲氣大明神燕津大明神廣濱大明神を祭る維新後之を改めて北殿は寶生如來阿闍如來大日如來を安置し南殿は釋迦如來阿彌陀如來を安置す

積善功德塔 銅の塔なり

納經處

善女龍王堂 池の中に在り雜木叢生す堂の背に大なる枯樹ありこは大師御手

植の白檀木なりと云ふ藤莖その枝幹を紆へり

一切經藏 六角堂なり

消防器械庫 常行堂の南側に在り

中門より二王門に至る迄の建物等を左に記す

中門 又は淨土門と云ふ 門額善通寺の三字

花藏院

本尊毘沙門天 弘法大師の作

觀智院

本尊は十一面觀世音菩薩 弘法大師の作

寶物左に記す

弘法大師御影

弘法大師の筆

不動明王

弘法大師の筆

現住職中山厚學僧都臨時説教及び毎月十七日の常例説教を開き佛道を弘むるに盡力せり前住職佐伯厚信僧正は花道及び茶道の宗匠にして插花は池の坊流其号を玉藻堂樟隣と稱し茶湯は千家表流家元千宗在の門弟其号を宗伯と稱す毎日花茶の教習ありこれ亦精神修養の一方法なり

二王門より大師堂に至る迄の建物左に記す

二十日橋 石の反橋にして扶欄も石なり昔は此橋より人を參詣せしめず唯毎

月二十日だけに通行せしむ故に二十日橋と云ふ

大辨財天小祠 二王門外塚の中に在り

二王門 門内左右の密迹金剛神は運慶の作

額字 遍照金剛閣 東寺觀智院僧正の筆

鐘堂

茶堂

閻魔堂 十王像 運慶の作

見真大師堂 親鸞聖人の木像を安置す

親鸞聖人即ち見真大師齡六十二歳の時下總鎌田の庄吉田源五右衛門の宅に暫く滞留教化し自ら影像を刻み其脊に一絶句を彫付け之を興へて出立す吉田家數代此像を秘藏供養しけるに或夜の夢に聖人現じ玉ひ子が影像を讃岐善通寺へ送るべしと靈告あり又善通寺の住僧も同様の夢あり刮目して待ち

居しに果して木像を送り來り互ひに夢を語り合ひ其奇瑞を感嘆すと云ふ
見真大師の一絶句に曰く六環暫寄鎌田邊。晨夕法談最宿縁。爲作真容今與子。
隨身待我樂邦天。

はやけ地藏 石像

今を距る三十年前妙齡の女人顔面のはやけを悲み日夜參詣祈願せしに遂に
はやけ消滅すそれより名あり今に靈驗著るし

裏門

弘法大師御影堂 三間と四間

禮堂 九間四面

中の間 三間半と四間

瞬目大師御影 弘法大師御自筆

弘法大師入唐の時母堂玉寄御前の名残り^{なご}を惜む情^{なさ}を慰さめんため庭前の池
に姿^{すがた}を寫し自ら其真影^{まかげ}を畫き母御^{ははご}へ獻つる此御影^{ごかげ}を瞬目大師と稱する由來
は土御門院の御宇承元三年八月二日之を禁裏へ勅請し玉ひ天皇内大臣藤原
公繼卿大納言藤原公房卿等と共に觀覽の時御影目を瞬^{まじろ}せ玉ふ御威の餘り今
より瞬目大師と崇むべしと宣下あり即ち繪師に命じて御影を七幅摸させ玉
ひ本御影を下し置れ御寄附の免田等あり

大師見形像 大師伯父從五位下佐伯道長作

大師像 御前立なり道範上人の作

四天王像

八祖畫像 真如親王の筆

多聞天王像 弘法大師の作 國寶

吉祥天像

弘法大師の作

國寶

額字 弘法大師誕生之場 一條關白忠良公筆

額字 屏風浦誕生所 山階大勳位晃親王筆

御守所 祈禱受付及び種々の符咒を授く

機關砲 日露戦役に旅順鷄冠山に於て分捕の五分間六百發の機關砲なり

護摩堂

本尊不動明王 弘法大師の作 國寶豫定

額面 二面 元祿十四年辛巳夏五月十一日寄附とあり一は竹の圖一は壽老

人の圖なり

什寶物館 新築

御誕生水 又は阿伽井と稱す 大師御降誕の節産湯に用ひたる井なり諸病平

癒の効驗ありと云ひ傳ふ

善通寺本坊

大玄關 改築

客殿 改築

庫裡 改築

大旭殿 新築

御影池 弘法大師姿を寫し玉ふ池なり

御影の松 御影池の畔に在り大師姿を池に寫し御影を畫き玉ふ時より今に榮

へて蔥々たり

石大卒塔婆 二基

準泥觀世音菩薩銅像

黒門 即ち勅使門なり

臺所門

善通寺寶物

五色佛舍利一粒 鍍金舍利塔に納めあり

八祖相承八拾粒の内一粒なり餘の七十九粒は京都東寺に納りて勅封と相成たる由即ち印度支那日本の三國傳來なり

御錫杖 閩浮那金 三國傳來八祖相承そじや 國寶

袈裟 八祖相承二十五條の袈裟作土印金なり

水瓶 金紫銅 八祖相承

御鉢 八祖相承

以上皆大唐惠果和尚より附屬品

一字一佛法華經 一部八卷 國寶

文字は大師の筆佛像は母公玉寄御前の筆

泥土多寶塔 弘法大師年七才の時仙遊原にて作り給ふ塔の中に釋迦と多寶の

二佛あり

前述の七種靈寶は昔し毎度禁裏御所へ送り奉り御覽に供す

其他歷朝の繪旨院宣教書數十通

龜山院御宸翰の金紙金泥法華經及び傳教智證興教理源の四大師行基明惠文覺西行隱元等の高僧の作及び筆菅原道實公始め諸名士の書畫諸名工の彫刻物古刀劔古器具等枚舉に遑あらず

善通寺境外舊蹟

三帝御陵 伽藍より北半丁餘に在り遍照院の舊跡なり後嵯峨院龜山院後宇多

院三帝の御爪髪を納めたる石の寶塔三基あり

仙遊原 現今練兵場 伽藍の北約五丁に在り大師幼稚の時堂を構へ泥土を以て佛像を作り之を禮して遊戯し玉ふ古跡なり

仙遊原大師堂 本尊は石像の地藏と大師童形の石像を祭る

皇太子殿下御行啓松 仙遊原に在り

明治三十六年十月十三日皇太子殿下御行啓紀念の爲め植たる松なり

玉泉院 西行庵と云ふ 伽藍より南約一丁餘に在り

本尊阿彌陀如來 立像

西行法師木像 碩阿法師作

西行法師小木像 山崎宗鑑作

西行法師小石像 西行自作 田子の浦の石を以て作ると云ふ

庵の額 久の松三字 花山院大納言愛徳筆

同 獨松庵三字 相國寺大典長老の筆

同 喬松亭三字 丸龜藩主高極侯の筆

堂の額 高隱二字 葛城慈雲大和尚の筆

門の額 玉泉二字 坊城大納言俊親の筆

阿伽井 玉の井と云ふ

右の額 玉井二字 三條大納言公修の筆

碑石銘 菅原長親の書

久の松 西行法師の愛せし松なり

西行の山家集に善通寺に住侍りしに庵の前に松のたてりけるを見て
久に經てわが後の世をどへよ松わどしのふべき人もなき身を

右の歌によりて久の松と名く

久の松記事 芝山中納言持豊の筆

古來久の松を咏する和歌俳句數多ある中左の四首を記す

敷島の道を種とや今も猶

櫻井三位供教

みどりぞ深きひさの松か枝

幾年か同じ緑りにしげらん

七條河内權介
陸則朝臣

其名さる久の松の木高き

西行の衣ぬれけむ松の露

はせ 斌

松を見てなき人戀し秋の暮

鴨立澤三千風

善通寺の背景

屏風浦 古今桑治の變

伽藍の背後は五岳列り峙ち恰も屏風を立るに似たり今は陸地なれども昔は

五岳の麓まで入海にして湖汐満ち來る故に屏風浦と云ふ弘法大師三教指歸に曰く然頃日間利那幻住於南閻浮提陽谷輪王所化之下玉藻所歸之嶼擲樟蔽日之浦

五岳

香色山 松樹蒼鬱翠色滴るが如し山を繞りて四國八十八箇所の本尊石像を安置す麓に五佛の石像及び阿伽井茶室あり半腹に稻荷神社林光亭あり頂上に佐伯神廟あり京極侯寄附の不動と愛染との石像を奉安し其下に大師の埋め玉ふ石棺に納めたる金瓶二箇ありと云ふ

筆山 其形ち筆に似たる故に名づく筆艸を生ず

筆の山と申す名につきて

西行

筆の山かきのぼりてもみつるかな岩のはさまの苔のけしきを

我拜師山 大師修行の時釋迦如來雲に乗じて出現し玉ふ大師之を禮拜す故に

我拜師山といふ北の麓に四國七十三番出釋迦寺あり

鷲の山常に住なり夜半の月

道範上人

來りて照す峯にぞ有ける

中山 昔し西行法師の結べる庵あり其所を水莖の岡と稱す

曇りなき山にて海の月見れば

西行

嶋こそ水のたへまなりけれ

水莖の岡の淡の浪よりや

爲家

筆の海てふ名には立らむ

火上山

右五岳は各弘法大師七寶を納めて國家の鎮護となし玉ふこと廣傳に出たり
後深草院寶治三年應宣に五岳の四至勝所を定め殺生を禁止し玉ふ文に曰く

寺邊殺生格律之所誠也仍定其境永以禁遏云々

獅踞象臥五岳を衛る

天霧山 一名獅子居山 形ち獅の踞るが如し

大麻山 一名象頭山 形ち象の臥るに似り

古書に五岳を寶生阿闍大日釋迦彌陀の五佛の中尊山と云ひ南の象頭山を普賢菩薩の山と云ひ北の獅子居山を文殊菩薩の山と云ふ即ち獅子居象頭の二山を協士山と稱す

第十一師團兵營

第十一師團は市街の南に在り明治貳拾九年九月に創設し同參拾年に完成す
善通寺南大門前直線道より以西の兵營左に

野砲兵第十一聯隊

衛戍監獄 砲兵々營の後方に在り

工兵第十一大隊 大日線路より南側

衛戍病院 工兵々營の南西

善通寺南大門前直線道以東に在りて片原町以南の兵營左に

歩兵第四十三聯隊

陸軍兵器支廠

被服庫 大日線路の南

師團司令部 大日線路の南

聯隊區司令部 大日線路の南

騎兵第十一聯隊

輜重兵第十一大隊

善通寺偕行社

神社

佐伯八幡宮 伽藍の西の丘陵むかに在り

善通寺記に曰く仲哀天皇 神功皇后 應神天皇 大師父母の神体あまのむす合殿にて皆

大師の作と云々玉垣の中に大師父母の廟あり七重塔石現在せり

丘陵は松林にして後は五岳あり前は眼下に市街あり二郡の曠野ひらきに飯野山あ

り北は一帯の海濱及び筆海中の諸島分明海を隔て備州の地方はつち勢揃たり南は

阿讃國境の連山波なみの如し實に眺望絶佳なり

稻荷神社 香色山半腹に在り大師入唐歸朝の節祭ると云ふ本邦最初の稻荷

神堂なり

神櫛神社 大字上吉田字皇子に在り

善通寺記に曰く皇子權現は上吉田村に在り弘法大師の勸請と云々人皇第十二代景行天皇の皇子神櫛王を祭る

景政神社 小石祠 鎌倉權五郎景政を祭る

塞神社 小石祠 八瀬彦と八瀬姫と久那戸を祭る

右二社併祀 字財之神に在り

嚴嶋神社 字砂古に在り

北向八幡宮 丸山に在り明治四年勸請す

荒魂社 四箇所

市街附近神社

八幡宮 大字下吉田に在り

善通寺町市街戸口數

市街戸數 一千九百貳拾六戸

同人口數 九千四百拾六人

内

男 四千九百四拾參人

女 四千四百七拾參人

但し明治四十貳年の調査に據る

政事の部

善通寺憲兵隊本部 大通りに在り

善通寺憲兵分隊 同所に在り

善通寺警察署 大通りに在り

高知大林區善通寺小林區署 中通り町に在り

仲多度郡役所 大日線路の南に在り

善通寺町役場 赤門筋に在り

宗教の部

真宗本派西光寺 赤門筋に在り

寶物 捻華釋迦如來坐像 行基菩薩作

身長貳尺五寸餘 臺坐金箔塗り 高貳尺七寸

真宗興正派出張所 片原町に在り

金光教仲多度小教會所 歩兵裏門筋に在り

日本基督傳道教會善通寺教會 中通町に在り

市街附近の寺院

真言宗甲山寺 筆岡村に在り

四國七十四番 本尊藥師如來 弘法大師作

詠歌 十二神味方にもてるいくさには

をのれとこゝろかまて甲やまかな

真宗大谷派淨証寺 大字生野に在り

真宗興正派養念寺 大字下吉田に在り

教育の部

私立善通寺幼稚園 西行庵の南西に在り

吉田尋常小學校 大字稻木字石川に在り

善通寺尋常小學校 字西山に在り

善通寺高等小學校 大日線路の南に在り

香川縣教育會仲多度郡部會事務所 皇子森に在り

私立吉田女學校 字財之神に在り

私立静修女學校 善通寺驛近傍に在り

私立盡誠中學校 大字生野に在り

療病の部

讃岐病院 赤門筋に在り

大島病院 同

川村病院 中通り町に在り

新居醫院 同

森村醫院 同

川崎眼科専門醫院 同

森岡醫院 歩兵裏門通りに在り

花房齒科醫院 大通りに在り

品田齒科醫院 善通寺驛近傍に在り

体育の部

大日本武徳會香川支部善通寺委員部道場 片原町に在り

圖書縦覧所の部

私立紫雲文庫 赤門筋に在り

通信貯金爲替運送の部

善通寺郵便局 中通り町に在り

善通寺赤門筋郵便局 赤門筋に在り

金融機關の部

善通寺支金庫 株式會社高松百拾四銀行貯蓄部善通寺代理店・片原町に在り

合名會社藤岡銀行 赤門筋に在り

株式會社多度津銀行善通寺出張所 同

工業の部

善通寺製燧株式會社 字本村道下に在り

花街藝妓劇場の部

貸座敷 九戸 字砂古裏に在り

内

娼妓 參拾五人

藝妓 五十四人

但し警察署明治四十二年調査に據る

富士見座 富士見町に在り

一樂座 善通寺驛近傍に在り

市街のまわり酺食の部

料理屋戸數 貳拾貳戸

内 料理專業 六戸

宿屋兼業 拾六戸

市街中旅客に必要な營業の部

宿屋戸數 八拾八戸

内 旅人宿 六拾九戸

木賃宿 拾九戸

但し警察署明治四十貳年調査に據る以下同斷

飲食店 百〇八戸

理髮營業 五拾九戸

湯屋營業 拾四戸

書籍商 四戸

風光の部

善通寺町は山秀ひげで市賑にぎはひ野曠ひらく海近うまし天然てんぜんの美観びかんに富とめり其中そのうちに就つて聊いさか名な利りの内外各四景うちうがいしよけいを擧あげ以もて世間よこしま攪勝かんせう探奇たんきの客きやくに報ほうす

善通寺境外四景

八幡山春望 五岳山夏雨

仙遊原秋月 神師社冬景

善通寺境内四景

天満宮幽林 巨櫛樟輕雨

御影池滑月 五重塔斜陽

信用ある旅館の部

旅館名	所在地
山本屋	山下兼治 赤門筋
魚勘樓	平尾兵助 同
明月樓	山中熊吉 延命町
錢屋	鹽田熊吉 中通町
八島館	八島文吉 片原町
木屋	齋藤熊太郎 赤門筋
旭館	市川貫五郎 片原町

備考

或る書に弘法大師祖先の世系を記して曰く高皇產靈尊の子天忍日命といふ者
 天孫彦火瓊瓊杵尊の日向に天降りまし、時神鸕鷀を護り奉りぬ忍日命三代の孫
 日臣命神武天皇の東征に隨ひ功あり天皇敕して道臣命の名を賜ふ道臣命より
 七代の孫武日命始て大伴の姓を稱し日本武尊東夷征伐の副將軍と爲り戦功を
 奏せしにより讚岐の地を賜ふ武日命の子大伴武持連始て大連に任せらる武持
 の孫御物に至り宿禰の姓を賜はる御物の子倭故連讚岐の國造に任せられ倭故
 の子歌連の時遂に佐伯宿禰と稱する事となりぬ歌連より十四代の佐伯直田公
 は弘法大師の父なりと
 右一説として参考に資す

明治四十四年二月一日印刷
 全 年二月五日發行

定價金 錢

著 者 伊 藤 一 郎

香川縣仲多度郡善通寺町大字
 善通寺參百貳拾八番地

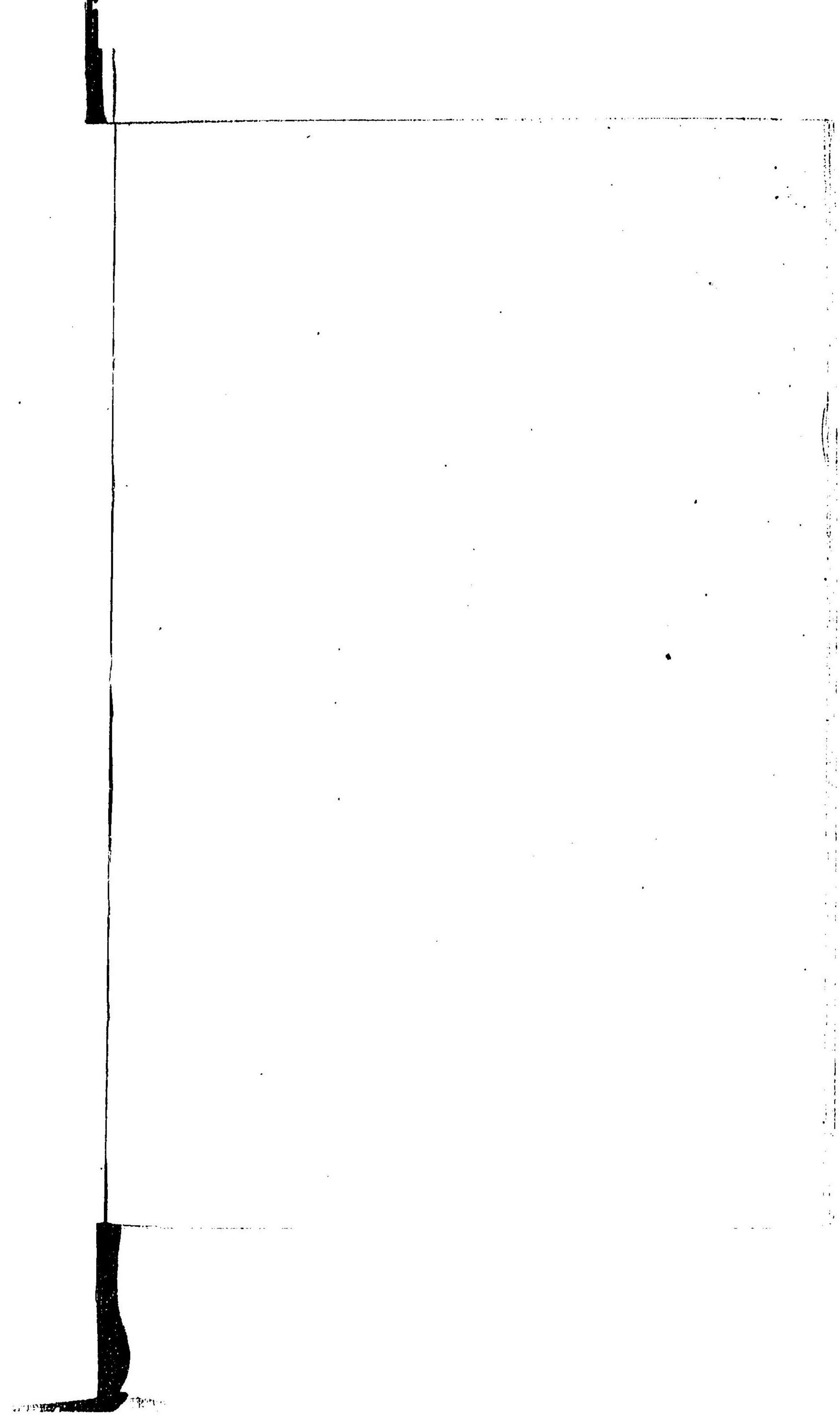
發行兼印刷人 小 野 秀 八

香川縣仲多度郡琴平町
 百八拾六番地

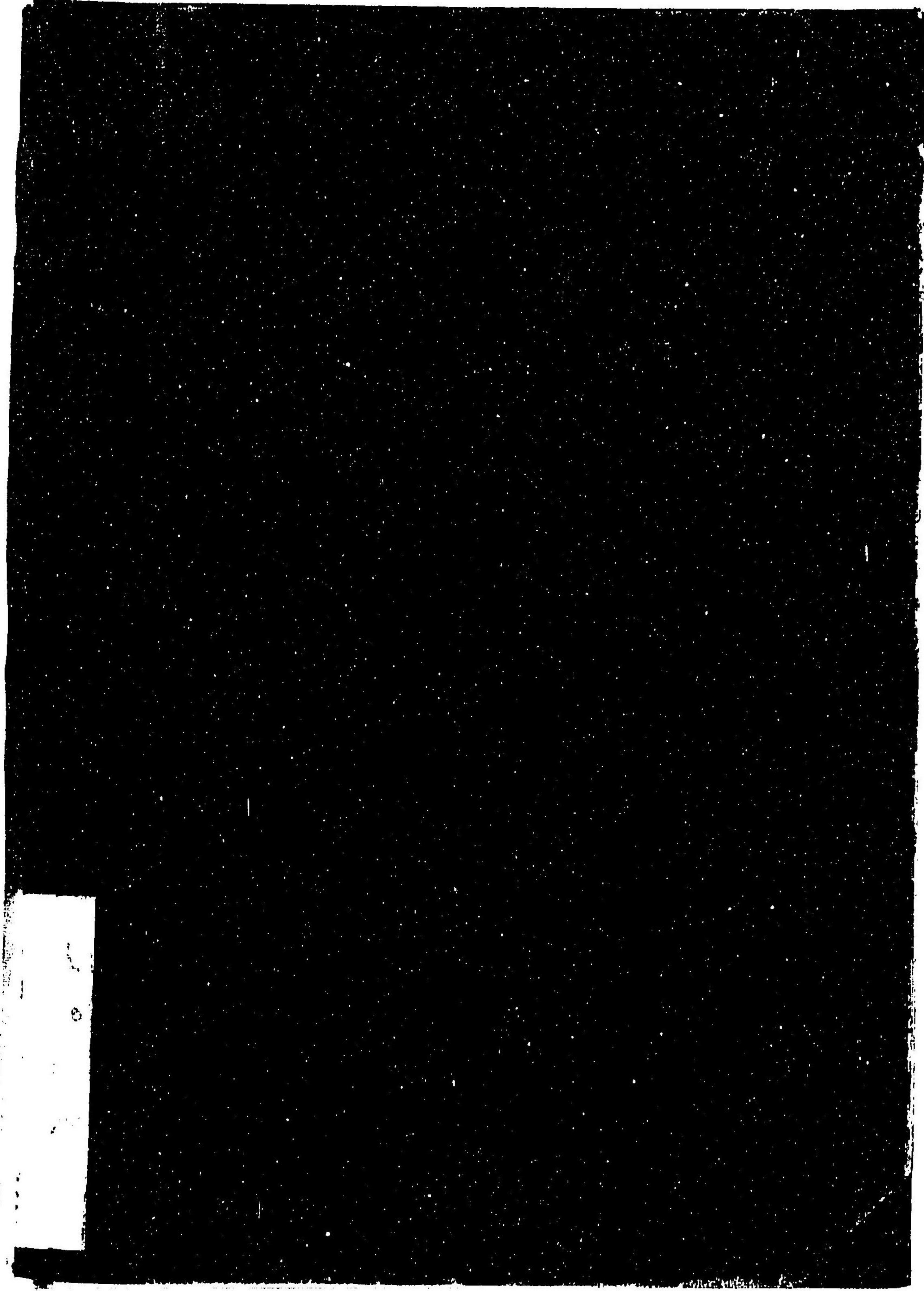
印刷所 小 野 活 版 所

香川縣仲多度郡琴平町
 百八拾六番地





327
414



0 1